

第7章

社会関係資本とマイクロファイナンス

—ベトナムを事例に—

はじめに

社会関係資本（Social Capital）と援助プログラムとの関係で、しばしば事例としてとりあげられるのが、マイクロファイナンスである。

マイクロファイナンスは、一般の金融機関を利用しづらい人々（土地無し層、女性、零細事業主等）に対して小口の融資や貯蓄サービスを提供するものであり、貧困削減のアプローチとして広く実施されている（岡本・粟野・吉田 [1999]）。土地担保の代わりにグループ連帯保証制度を取り入れるなどして、通常の銀行とは異なる制度上の工夫をこらしており、この実施プロセスにおいて形成される「グループ内の信頼関係」などが社会関係資本の事例とされている。

世界銀行のホームページでは、マイクロファイナンスにおける社会関係資本の役割を3段階に分類している⁽¹⁾。

第1に、外部者の介入以前に存在する社会関係資本の例として、回転金融講（Rotating Savings and Credit Association: ROSCA）がある。メンバーが一定額を毎回出資しあい、順番に利用していくインフォーマルな慣行であり、規模、金利などは国・地域によって異なる。これは、先に利用した者が途中で抜けたりしないで、全員に利用の機会が回るまで出資しつづける、という規範の上に成り立っている。つまり、相互信頼関係や規範という社会関係資

本が物的担保を代替している。

第2に、マイクロファイナンス実施の段階では、既存の社会関係資本が利用され、活動を通じて新たな社会関係資本が形成、強化されていく。例えば、バングラデシュのグラミン銀行は、借り手である貧困層の女性に、融資の前提として5人グループを結成させるが、これは友人関係、近隣の互助関係という社会関係資本を活用している。また活動を通じてメンバー間や銀行員との間に、融資・返済履行に関するモラル、トラブル発生時の解決手段などの新たな社会関係資本を形成していく。

第3に、こうして蓄積された社会関係資本（＝グループの能力）を利用して、貧困層は市場やフォーマルな金融機関へのアクセスを改善していく。

このように、援助プログラムにおける社会関係資本の役割を説明する上で、マイクロファイナンスは使いやすい事例なのである。これを一歩進めて社会関係資本を機能の違いによって分類したものに、Word Bank [2000]がある。ここでは、社会関係資本をグループ内の結束を強める「結束型社会関係資本」(Bonding Social Capital: 以下、結束型 SC) と、貧困層をフォーマルな制度（銀行や市場など）に近づける働きをする「連携型社会関係資本」(Linking Social Capital: 以下、連携型 SC) とに分類し、長期的には前者だけでは不十分で後者を強化していかなければならないとしている。例えば、インドの NGO である Myrada は、介入当初は村落共同体内でクレジットを運用するグループの形成をはかり（結束型 SC の動員）、その後、グループごとに商業銀行の口座を開設させる。グループがフォーマル機関とのやりとりをする能力・自信をつけるにいたると（連携型 SC の形成）、Myrada はグループから離れる。

しかし実のところ、このプロセスは改めて社会関係資本を引き合いに出すまでもなく、マイクロファイナンスのベストプラクティスと考えられてきた。したがって、これを基礎にした定義だけでは、「開発プログラムのなかで、既存の社会関係資本を活用したり、新たな社会関係資本を形成したりする」という単線的な発想以上のものは出てこない。

そこで、本章では、筆者が調査で訪れたことのあるベトナム北中部ゲアン省の農村における金融を事例として、社会関係資本の概念についてより詳細な検討を試みたい。なお、ベトナムは南北で社会構造に大きな違いがあるため、本章の議論は北（中）部のみを念頭において論じる。

第1節 社会関係資本の機能と範囲

1. 社会関係資本の定義

本章では、「社会関係資本」の定義を「人や組織の関係のあり方を規定する制度や規範、ネットワークの総称」とする。さらに踏み込んだ定義は、機能や性質に着目して行うべきであろう。マイクロファイナンスとの関連では、Collier [1998] の「社会関係資本は市場を通じてではなく社会的関係を通じて経済的効果をもたらす」（下線は引用者による）という定義が重要である。

金融サービスは、本来ならば市場メカニズムを通じて供給される。そして政府が法整備や監督によって市場メカニズムを有効に機能させる。しかし、途上国の農村では、情報の不完全性や法執行コストの高さのために、フォーマルな市場が機能しない。そこで、日常的な社会関係によって情報が把握できる範囲で、信頼に基づくインフォーマルな取引が行われるのである。市場と政府の失敗を補正する組織として、速水 [1995] が共同体（community＝濃密な人的交流によって形成される信頼関係で結ばれる集団）の役割を指摘したように、成功したマイクロファイナンスも、こうした共同体内の社会関係資本を通じて、情報収集や規則執行のコストを削減し、「金融サービスの提供」という経済的成果を達成したのである。

2. マイクロファイナンスにおける社会関係資本の役割

先行研究においては、マイクロファイナンスに関する社会関係資本の役割として、以下の2点が注目されている。

第1に、個人の能力を補完する役割である。貧困層が活動を通じてグループの信頼関係や外部との交渉能力を高め (=社会関係資本を形成し)、経済・社会活動へ参加していくのを促進する働きである。世界開発報告はこの役割に焦点を当てている。

第2に、マイクロファイナンスを金融制度として成功させるために、市場を補完する役割である。貧困層に自主的にグループを形成させ、返済を連帯保証させるという制度は、マイクロファイナンス機関が、貧困層の社会関係資本を利用して情報の非対称性やフォーマル制度の不備を補完し、返済を確保する手段である⁽²⁾。

本章では、主として市場を補完して金融制度の確立に資する社会関係資本の役割に焦点を当てて論じる。事例として扱うベトナム北部においては、共同体の結束が強く、社会主義体制と相まって、個々人を支えあうような社会関係資本がすでに豊富に存在しているため、個人の能力補完という機能は、相対的に役割が小さいと思われるからである。一方の市場補完機能に関しては、より詳細な検討が必要である。グループの連帯保証といった狭い範囲の社会関係資本のみに着目しては、ベトナムの農村金融の課題を記述するのに不十分である。現実の問題をカバーする枠組みを設定し検討することで社会関係資本の概念が鍛えられるだろう。

3. 社会関係資本の範囲・機能・価値

次に本章での社会関係資本の分析の枠組みと着眼点を述べる。

まず、社会関係資本が作用する範囲について、Narayan [1999] や Wool-

表1 社会関係資本の機能と範囲

機能 範囲	結束型SC	接合型SC
ミクロレベル	共同体を結束させる価値観や社会関係 (+)	共同体を外部とつなぐ制度, 関係, ネットワーク (+)
マクロレベル	国家のありようや法律を決定する社会の価値観, 規範 (+)	フォーマルな制度の能力, 信頼性 (+)

(出所) 筆者作成。

cock [1998] が指摘するように、ミクロレベルとマクロレベルとに区別する⁽³⁾。農村共同体や同じカーストグループなどの範囲で作用するものをミクロレベルの社会関係資本とし、国家など大きな範囲で作用するものをマクロレベルの社会関係資本とする。

次に、社会関係資本の機能について、Narayan [1999] に従い、「結束型 SC」と「接合型 SC」(Binding Social Capital: 以下、接合型 SC) に分類する。結束型 SC とは、共同体の構成員に協調行動をとらせる社会関係や規範である。接合型 SC とは、共同体を外部と結びつけるネットワークであり、外部の他者との関係で規定される。先述の連携型 SC と同義で使用する。

この機能と範囲を組み合わせると、表1のように社会関係資本を四つに分類できる。

ミクロレベルにおける結束型 SC とは、共同体内部を結束させるさまざまな社会関係や価値観、規範である。Narayan は、共同体内の自助能力を高める結束型 SC だけでは共同体は孤立し、「構成員が等しく貧しい」状態から抜け出せないで、共同体を他の共同体や国家とつなげる接合型 SC が重要だとしている。

マクロレベルにおける結束型 SC とは、国家のありようや法律などフォーマルな制度を決定する社会の価値観や規範である。また接合型 SC とは、フォーマルな制度の能力や信頼性である。これらについてマイクロファイナンスとの関係で論じたものは少ないが、制度確立を考える上で非常に重要である。「ベトナムには社会関係資本らしきものが豊富にあるのに、問題が生じ

るのは何故か」という疑問と関係してくるからである。この疑問に対するヒントとなるのが Rose [1998] の旧ソ連社会についての研究である。Rose は、旧ソ連を「組織の数は多くその地位も高いが、法治ではなく人治であり、フォーマルな組織が失敗した反近代的社会」と定義した。そして、これを補うために形成された社会関係資本のネットワークが体制移行後も国家や市場に影響を与えていると指摘したのである。ベトナムも同様に、建前としてフォーマルな制度は尊重されているものの、当てにはされていないという表現がふさわしい。これらマクロレベルの社会関係資本をプログラム実施の初期条件としなければ、マイクロファイナンスの制度作りは成功しないであろう。

また、Rose が指摘するように、社会関係資本は、常に価値一定で同じ方向に作用するわけではない。例えば村落共同体の「困ったときはお互いさま」という価値観は、通常、構成員にとっては有益だが、近代的な金融慣行にまで広げて適用されると、返済不履行が安易に起こると考えられる。したがって、既存の社会関係資本を活用する際にも、新たな形成をはかる際にも、プログラムの目的（＝金融制度の確立）にとってマイナスに作用する社会関係資本の影響を排除する工夫が必要になるのである。

第2節 ベトナムの社会関係資本

本節では、前節で設定した枠組みに従い、ベトナム北部農村でマイクロファイナンスに関する社会関係資本を概観する。

1. ミクロレベルの社会関係資本

ミクロレベルの社会関係資本の機能が及ぶ範囲は、主として農村共同体や末端の行政単位だと考えてよいだろう。ベトナムでは、100世帯程度からな

る自然村 (Thon) が「農村共同体」であり、数カ村で構成されるのが行政区の最小単位であるコミューン (Xa) である。

この内部の構造は比較的均質で平等であり、結束型 SC を特徴づけている。平野部農村内は、大方キン族 (ベトナム人) で占められ、民族やカーストによる階層分化は存在しない。伝統的な互助思想と社会主義的な平等主義が相まって、共同体内部の結束が強く、冠婚葬祭や農作業などの共同作業のほか、米などを出資しあう講も盛んに行われている。

また、ドイモイ後に土地所有権の売買が認められるようになったものの、土地所有面積の格差は少なく、したがって所得格差も少ない。筆者が調査したゲアン省では、子供が村外で職を得て世帯の人数が減った世帯の土地を新たに世帯をもうけた若い夫婦に分配する、などといった土地再分配が現在も実施されていた。

性別による格差も非常に少ない。儒教的な男尊女卑の価値観の影響を受けていないわけではないが、教育の機会は性別に関係なく確保されており、家計をやりくりしている (財布を握っている) のは妻であることが多い。

したがって、共同体内部の「排除」や「縦」の構造は、南アジアほど重視する必要はないと思われる。一方、規範を破った場合、共同体のあらゆる社会関係資本の恩恵を受けられなくなるリスクは高いといえよう。

接合型 SC にあたるのが、村々にまで張りめぐらされた社会主義体制を支える組織網である。婦人会や農民会といった大衆組織は、コミューン、県、省、中央と縦のラインでつながっており、行政サービスの一端を担っている。他の省で洪水などの自然災害があれば、婦人会組織が寄付を集めて被災地に送るといった慣行もある。国際 NGO 等の外部団体がプログラムを実施する場合も、こうした大衆組織と連携するが多い。

したがって、インフラの不備な遠隔地の共同体を除き、一般的には接合型 SC が豊富だと言ってよいだろう。

2. マクロレベルの社会関係資本

ベトナムにおいて、法律などフォーマルな制度は存在するものの、それを尊重する価値観や規範といったマクロレベルの結束型 SC が有効に機能しているとは言い難い。また、金融機関などフォーマルな制度の能力や信頼性といった接合型 SC も希薄である。

代わりに共同体の関係（マイクロレベルの社会関係資本）が多層的・多層的に存在する。すなわち、農村共同体のみならず、「人脈」や「コネ」といったあらゆる共同体の関係がインフォーマルな社会的・経済的やりとりを支えている。これは、共同体の構成員にとっては恩恵をもたらすが、国全体としては、公正な資源配分が行われず非効率である。例えば、正規の雇用先から受ける賃金の何倍もの収入は統計に現れず、個々人はこの恩恵に浴しているが、政府の税収にはつながらない。

金融制度についても、通貨や銀行というフォーマルな制度に対する信頼感が弱く、これが金や外貨による膨大なタンス預金を生み、都市部でも講が盛んに行われているのである。

農村金融を担う機関としては、ドイモイ開始以前から国営銀行の末端組織的な位置づけの農村信用組合があった。だが、金融改革の流れのなかで、規制・監督の枠組みも強化されないまま国営銀行とのリンクが切れたこと、1980年代後半にハイパーインフレが起きたこと、農村合作社向け融資が不良債権化したことなどの影響を受けて、農村信用組合の大部分が破産した。こうした過去の経験がもたらした「フォーマルな金融制度への不信」という負の社会関係資本があるがゆえに、インフォーマル金融の利用率が高いのである（服部 [1997]）。

しかし、経済規模が拡大すればインフォーマルな制度では需要に対応しきれず、破綻した際のリスクも拡大する。長期的には、信頼に足るフォーマルな制度を確立して建前と実態との乖離を縮めていくべきであろう。表 2 にま

表2 ベトナムの社会関係資本の機能と範囲

機能 範囲	結束型SC	接合型SC
マイクロ レベル	農村共同体の結束の堅さ(+) インフォーマルな人脈主義(+-)	婦人会等全国的大衆組織の活発な活動(+)
マクロ レベル	法律を恣意的に運用, 軽視する価値観(-)	フォーマルな制度(通貨や金融機関)の能力, 信頼性の欠如(-)

(出所) 筆者作成。

とめたベトナムの社会関係資本の機能と範囲が、マイクロファイナンスのスキームで考慮すべきものである。

第3節 北部ベトナムの農村金融の検討

前節をふまえ、筆者が調査を実施したベトナム北中部における農村金融と社会関係資本との関係について検討する。

1. 調査方法と地域の概要

調査は、ベトナム北中部に位置するゲアン省のタンチュン県(Thanh Chuong District) タンリン・コミュニン(Thang Linh Commune)のT村で、ほぼ全世帯を対象に質問票を配布して61世帯から回答を得た。このアンケートと各機関でのインタビューが主要な情報源である⁽⁴⁾。

ゲアン省はアンナン山脈が海岸近くに迫る地勢で、米作が可能なのは沿岸や川沿いの平地だけである。しかも、台風による塩害や洪水、旱魃などの自然災害が頻繁に発生し、メコンデルタや红河デルタに比べてはるかに生産性が低い。近年の政府による貧困撲滅政策で灌漑整備が進み、1996年にやっと省内の食料自給を達成した。産業も限られており、「貧しい省」の一つに数えられている。

しかし、伝統的に教育に熱心な地域であり、ホーチミンやファン・ボイ・チャウ（20世紀初頭に日本遊学運動を起こした近代民族運動の創始者）を排出し、今なお共産党への信頼が厚い地域でもある。

調査地のタンリン・コミュニオンは、山岳丘陵地帯に分類される。11村1325世帯のうち、1295世帯（98%）が農業に従事しており、1718名（主に世帯主）が農民協会の会員になっている。米作は自家消費が中心で、近年は畜産業などによる多角化がはかられている。農業以外では竹を材料にした家内手工業（バスケットやマットなど）が現金収入源となっている。貧困世帯は、1995年には730世帯だったものが、97年には200世帯まで減少した。

2. 資金需要と農村金融の概況

まず、調査村でのアンケートから農村金融の概況を見てみよう⁽⁵⁾。機関別の融資利用目的や平均借入額は表3のとおりである。

農業農村開発銀行（Vietnam Bank for Agriculture and Rural Development:

表3 融資利用状況

目的（複数回答可） 借入先	平均融資額 (VND)	融資利 用者数	生産 投資	住 宅	教 育	耐 久 消費財	病 気 家族の死	その他 /不明
農業・農村開発銀行	7,000,000	2	2	0	0	0	0	0
貧 困 者 銀 行	1,100,000	4	3	0	0	0	0	1
商 業 銀 行	3,811,111	9	5	1	1	1	0	2
人民信用基金	3,992,308	27	17	3	3	0	0	4
農 民 協 会	—	—	—	—	—	—	—	—
講	1,067,273	22	7	3	1	0	—	11
親 類	2,683,333	22	5	3	3	0	1	10
友 人	1,960,000	10	2	1	3	0	0	4
その他（雇用先）	—	1	0	0	0	0	1	0

（出所）筆者作成。

VBARD) は、その名のとおり農業農村の振興を目的としている。全国規模の支店網をもち、コミュニティレベルで窓口業務を行う。土地使用証書を担保として求め、事業計画を審査条件として、短期(1年)、中期(1~5年)、長期(5年以上)の融資を行う。融資額は1000万ドンを上限とし、金利は月1%である。調査村では2件の利用しかなかった。

貧困者銀行(Vietnam Bank for the Poor: VBP)は、ベトナム政府がグラミン銀行にヒントを得て設立した貧困層をターゲットとする機関である。コミュニティの人民委員会や婦人会、農民協会などが、ターゲットとなる貧困世帯の選定、融資業務を代行する。担保の代わりに大衆組織が信用保証を行う。融資額は300万ドンを上限として、最長3年の返済期間、月0.7%の優遇金利である。調査地での利用は4件であった。

人民信用基金(People's Credit Fund: PCF)は、ベトナム中央銀行がカナダ政府の協力を得て推進するスキームである。組合法に基づき、組合員の出資(1人当たり5万ドン程度)をもとに設立され、コミュニティを活動範囲としている。組合員の出資金や貯蓄を原資として組合員に短期(1年未満)の融資を高め金利設定(月1.4%前後)で行う。タンリン・コミュニティでは、この人民信用基金の利用が最も多く、27件であった。融資手続きが簡単で、返済も少額ずつなので利用しやすいとの声が多かった。

民間の商業銀行(Rural Joint Stock Bank)の利用も9件あり、生産投資以外の目的でも利用されていた。

講は貯蓄・融資両方の側面をもつ。ベトナムではHo, Hui, Phuongなどと呼ばれ、金利は課さない場合が多い。調査村でも活発で、3分の1の世帯が参加していた。

親類や友人からの借金については、投資の割合が低く、住宅や教育目的の他、目的が明記されていないものが多い。返済条件も特に定めず「収入があったとき」との回答が多かった。

つづいて、預金の利用状況を見てみよう。

農業農村開発銀行や貧困者銀行は、預金目的ではまったく利用されていな

表4 預金利用状況

目的（複数回答可） 貯蓄先	平均貯蓄額 (VND)	利用者数
農業・農村開発銀行	—	0
貧困者銀行	—	0
商業銀行	5,000,000	1
人民信用基金	344,063 (48,621) ¹⁾	32
農民協会	633,333	3
講 ²⁾	1,067,273	22
その他（金(gold)）	n.a.	1

(注) 1) 主要な貯蓄者3件を除いた平均。

2) 融資と同じデータ。

(出所) 筆者作成。

い。また、商業銀行を利用している世帯は1件だけである。

人民信用基金の利用率は高いが、出資金（定額の5万ドン、一部3万ドン）と預金額を混同した回答が多く、定額以上を預金しているのは3件にすぎない。出資金に対しては、毎月1%の配当があるが、将来に備えて貯蓄をするというよりも、融資を得るために最低限を出資しているようだ。

また、ベトナムでは未だに高額の貯蓄を金（gold）にして保持する習慣があるが、金による貯蓄があると回答した者は、高い塀に囲まれた立派な家を構えた富裕な世帯で、人民信用基金にも200万ドンの預金があるほか、近隣の者に頼まれて金貸しも行っている。

以上の融資と預金の利用状況から、一部の富裕世帯を除き、融資への需要が高いことがわかる。しかし、現行のスキームが需要に十分対応できているとは言い難い。21名（34%）が、収入増加のために家畜・家禽、商売などへの投資を希望しているが、ほぼ全員が資金と技術が制約要因だと回答している。

資金需要に対応でき、しかも金融制度として持続していくスキームとは何

なのだろうか。講、貧困者銀行、農業農村開発銀行、人民信用基金を取り上げ、社会関係資本がどのように作用しているのかを見ることにしよう。

3. 講と社会関係資本

講はマイクロレベルの結束型 SC を活用した代表的事例である。61世帯中22世帯が参加していた。

表5は参加目的ごとに平均出資金額をまとめたものである。件数が多いのは、特定の目的ではなく自助という回答で、掛け金は30万ドンと少ない。何かあったときに助け合える関係づくりもといった社会的目的が強いと言える。

次いで、生産投資目的があるが、家畜・家禽生産を目的とする掛け金は100万ドン程度でフォーマルな機関の融資額に比べて少ない。地域内の互助機能だけでは高まる資金需要に対応しきれないといえよう。Narayanが指摘する結束型 SC の限界である。

では、マイクロレベルの結束型 SC と講の参加・不参加とはどのように関係しているのだろうか。排除は働いていないのだろうか。

表6は、(1)講の参加世帯、(2)非参加世帯のうち他のフォーマルな機関から

表5 講の参加目的と平均出資額

利用目的	件数	平均出資額 (VND)
豚の買付販売	1	5,000,000
他のローン返済	1	5,000,000
家畜	5	1,020,000
自助	10	303,333
農地改良	1	1,500,000
生産(詳細不明)	1	500,000
家の増改築	3	2,183,333
合計	22	1,113,333

(出所) 筆者作成。

表 6 講の参加状況と世帯の収入源

	年間所得 (VND)		収入源 (%)										
	世帯 当たり	1人 当たり	米	その 他作物	家畜・ 家禽	家内 工業	商 業	政府 機関	年 金	送 金	そ の 他	合 計	
(1)講の参加者 (22世帯)	6,115,636	1,202,474	34.7	5.6	31.4	17.8	3.1	0	6.1	0	1.3	100	
講 の 非 参 加 者	(2)他機関からの 融資利用者(21世帯)	6,110,238	1,172,836	45.7	4.0	19.2	10.9	0	9.9	9.1	1.2	0	100
	(3)融資非利用者 (18世帯)	7,214,556	1,572,759	31.2	5.7	22.2	4.8	0.7	18.8	12.9	3.7	0	100

(出所) アンケートをもとに筆者作成。

融資を得ている世帯、(3)講にも参加せず他機関からも融資を得ていない世帯とにグループ分けし、それぞれの収入源構成を示したものである。

(1)の講参加世帯には、公務員等定期収入のある世帯が一つもなく、その分、家畜・家禽や家内工業に頼る割合が多い。安定的現金収入のない世帯だからこそ、講のような互助機能を必要としていることがわかる。また、フォーマルな機関の融資利用者も多く、活発な資金需要がうかがわれる。

講の非参加世帯については、(2)フォーマル機関の融資利用世帯と(3)非利用世帯とに区分した。(2)のグループのうち、月給や年金などの定期収入のある世帯ほど、投資以外の目的にもフォーマル機関から融資を受けている。(3)のグループは、講に参加せず、フォーマル機関の融資も利用していないと同時に、インフォーマルな借金も少ない。このグループは2種類に大別できる。第1は定期収入のある世帯である。第2は年金に頼る老夫婦、寡婦世帯等である。年金生活者は収入が安定していて講に参加する必要もないし、借金をしてまで新たな投資や大きな消費をするインセンティブはないと思われる。寡婦世帯(3世帯)は、自家消費用の米作に大きく依存しており、現金収入を稼ぐ働き手がないため、資金フローが限られている。したがって、講に参加する余裕も、フォーマルな機関から融資を得て生産投資することもでき

ないようである。

以上から、講への参加の決定要因は、相互扶助の必要性和資金需要の高さであることがわかる。不参加の理由は、経済的要因（参加不要であるか、資金フローがないか）であり、社会的排除が働いているとは言えない。寡婦世帯に対しては、親類や隣人が農作業を手伝ったり、子供の学費の面倒を見たりしている。別の形で結束型 SC が機能しているので、ベトナムの農村で「排除」を過大視する必要はないであろう。

4. 貧困者銀行と社会関係資本

貧困者銀行（VBP）は、結束型 SC と接合型 SC を活用している。すなわち農民協会や婦人会が、貧困撲滅を掲げる政府のプログラムとコミュニン内の貧困層とを仲介する接合型 SC の役割を果たしている。そして、平等主義や村内の困った者を助けるのは当然と考える規範（結束型 SC）が、融資を貧困層へ到達させる働きをしている。

VBP のスキームは、世界銀行などの援助機関から批判されている。貯蓄を動員せず予算に応じて融資を配分するバラマキ型であること、融資利用者の選定プロセスが不透明であることが、金融機関としての持続性を確保できないこと等が問題にされている。

だが、アンケート結果によると、融資利用者 4 世帯のうち、家畜からの収入の多い世帯が 1 世帯混入していたものの、3 世帯は 1 人当たり収入が最下位グループに属していた。概ね、貧困層への融資提供という目的は果たしていると言ってよいだろう。ゲアン省の場合は、政府への信頼が厚いことも関係しているかもしれないが、融資対象者の選定はそれ以外の者から信認を受けているように思われた。

一方の金融制度としての持続性については、世界銀行の危惧するとおりである。「返済」という金融のルールが定着しているとは言い難い。「何世帯にいくら貸し付けた」という情報は各レベルですぐに出てくるが、返済状況に

関する詳細な情報が入手できなかったのは、返済が重視されていないことの現れであろう。

貧困層に低利の融資資金を渡すのは、いわば「気分の良い」作業であり、大衆組織のスタッフが代行するのは簡単である。だが返済に関しては、「困窮した人」から取り立てを行うほどのインセンティブは働かない。形式上、大衆組織が信用保証をしているものの、返済されなくても共同体内の誰も被害を受けないからである。

つまり、ミクロレベルの社会関係資本が、貧困層への資金配分という側面でプラスに機能し、金融機関の持続性という側面ではマイナスに機能しているといえよう。ただし、急速な経済発展による所得向上が進むなかで、このスキームの持続性をどこまで重視する必要があるのだろうか。タンリン・コミュニティの貧困世帯数は、1995年には730世帯だったものが、97年には200世帯まで減少した。これに鑑みると、中期的な貧困対策政策手段と割り切って政府の資金がある限り融資を行うと考えてもよいのかもしれない。

5. 農業農村開発銀行と社会関係資本

調査村における農業農村銀行（VBARD）は、ミクロレベルの接合型 SC をうまく活用できず、結束型 SC の負の影響を受けている事例と言える。

VBARD は、貧困対策を目的としているわけではないので、金融制度としての持続性を軽視するわけにはいかない。ドイモイ以前は政府の予算配分機関であったが、1988年に中央銀行から独立し、90年から一般農家への融資を開始した。全国規模の支店網をもち、末端の窓口業務はいくつかのコミュニティにまたがる支店（インターコミュニティ支店）で行っている。

金融制度の確立に向けて努力している様子はいかがえる。職員のインセンティブを發揮させるため、インターコミュニティ支店では職員を長期契約で雇用し、職員 1 人当たりの、(1)融資残高、(2)返済率、(3)延滞率をパフォーマンスの基準とし、さらに勤務態度を加えて、給与額を決定している。預金の動

員にも力を入れており、ゲアン省全体では融資資金の8割を預金に依存している。ただし、個々の支店スタッフが預金を集めることはなく、預金利率も中央銀行に上限が規定されているので、まだ改善の余地がある。

このような金融制度確立へ向けた努力があり、VBARD 全体の評価は高いにもかかわらず、南北デルタ地域に比べゲアン省における利用率は低い⁽⁶⁾。調査村でも VBARD の融資利用者は2世帯で預金利用者はなく存在感は薄かった。

最大の要因は、南北デルタ地域に比べると資金需要が小さいことであろう。自給ぎりぎりの米作に依存している農家が長期の融資を着実に返済していくのは難しい。より小規模で短期返済のスキームのほうが資金需要の形態に適しているといえよう。

これに加えて、ミクロレベルの社会関係資本をうまく活用できていないことも問題である。VBARD の融資申請の際には、事業計画など書類作成に手間がかかる。他省では、農民協会や婦人会がこの作業を手伝ったりするが、ゲアン省ではそのような活動があまり盛んではない。したがって VBARD の職員が事業計画作成を手伝わなければならないが、手間がかかる上、人手が足りない。ちなみに、職員は1人当たり平均700世帯を担当しているが、融資の前には当該世帯を訪問して事業計画を審査する必要もあり、オーバーワークになっている。

さらに、「共同体の規範」が「フォーマルな金融制度の規範」にマイナスの影響を与えている。VBARD の融資利用者の1人はトラクターを購入したが、すでに返済線延べ措置を受けている。理由は、村人に依頼されて収穫期までツケ払いで運搬を手伝ったが、収穫が悪くて料金を払ってもらえなかったとのことである。共同体内の互助機能が優先され、返済不履行という負の外部性を VBARD に押しつけたということが出来る。

6. 人民信用基金と社会関係資本

マイクロレベルの社会関係資本を活用するとともに、マクロレベルの社会関係資本である金融規範を内部化することに成功したのが人民信用基金(PCF)であった。

ドイモイ後に農村信用組合が破綻した後に農村金融を担うものとして、新組合法に基づいて推進されたスキームがPCFである。組合員の出資金をもとに設立され、コミューンを活動範囲とし、ベトナム中央銀行の省の出先機関が認可・監督を行う。職員は省都で研修を受け、毎月業績報告を行う。PCFは金融仲介機能を重視し制度の確立をめざしているため、預金動員を重視している。ただし、農村内での預金動員には限りがあるため、上部機関として省・中央にある基金が都市部で預金を動員し農村に融資資金を環流しているとのことである。

現在、タンリン・コミューンで活動しているPCFは1995年に設立された。会員は563人というから、コミューンの半数弱の世帯が組合員ということになる。アンケート調査の結果もその利用率の高さを示している。VBARDと違い、簡単な融資審査、小口の融資と月賦返済など、利用しやすいスキームだからであろう。

PCFのスキームは、マイクロファイナンスの推進機関から最も評価されている。しかし、全国レベルで急速に設立数が増えた一方で、業績が悪化して認可が取り消された機関もある。タンリン・コミューンにも以前は二つのPCFがあったうちの一つは活動を停止し、一つは好成績を上げて表彰された。

好成績を上げたタンリン・コミューンのPCFの成功要因はどこにあるのだろうか。このPCFの理事長はコミューンの農民協会の代表でもあり、彼の果たした役割が大きい。農民協会は徴税の代行をするほか、貧困者銀行から委託を受けて貧困世帯に融資を行っている。また、農民協会のメンバーが

参加する講がコミュニン内に 50 グループあるといった情報も彼が把握している。こうした報告をもとに、省の農民協会は、省内の講の数や規模を把握できているのである。これだけの情報をもってれば、PCF の融資先にも適切な判断が下せるだろう。また、理事長自身も役人ではなく村に住む農民なので、自身のパフォーマンスが悪ければ、村人からの信頼を失うことになる。

PCF は理事長のほか、コミュニン出身の高卒の女性を会計として 2 名雇っている。3 人は有給スタッフだが、PCF の業績に応じて支払われるので、1997年に干魘が起きた際は、リスク基金を使っても足りず無給だったという。つまり、スタッフは農民で生活手段があるので、いわばボランティア的に仕事をしているのである。また、PCF の事務所は村の集会所の一角にあり、非常に小さい。人口が密集していることなども移動のコストを下げている。

以上のように、タンリン・コミュニンの PCF は農民協会という大衆組織のネットワーク（接合型 SC）を利用して、上部機関や地方政府から技術や資金協力を得ると同時に、共同体内部の情報を集め、コストを削減している。

さらに PCF は出資者（預金者）、借り手、そしてスタッフがすべて共同体内の同じ顔ぶれで、破綻のリスクを共有しあう仕組みになっている。これにより、「融資を期限内に返済する」というフォーマルな金融機関にとって必要不可欠な規範が、共同体の結束型 SC として内部化されたのである。

これらによって、タンリン・コミュニンの PCF は、高い利用率と良好な返済率を達成し、金融仲介機関として人々の信頼を集めるのに成功しているのである。

7. まとめ

これまで見てきた各制度における社会関係資本の作用を整理したのが表 7

表7 各制度における社会関係資本

講の場合			貧困者銀行の場合		
機能 範囲	結束型SC	接合型SC	機能 範囲	結束型SC	接合型SC
マイクロ レベル	相互扶助に+作用 SCの排除作用 はなし	—	マイクロ レベル	融資配分に+ 作用 返済に-作用	融資仲介に+ 作用
マクロ レベル	—	—	マクロ レベル	—	—

農業農村開発銀行の場合			人民信用基金の場合		
機能 範囲	結束型SC	接合型SC	機能 範囲	結束型SC	接合型SC
マイクロ レベル	返済に-作用	活用できず	マイクロ レベル	融資配分に +作用 返済に+作用	融資仲介に +作用
マクロ レベル	—	—	マクロ レベル	フォーマル な制度を重 視する規範?	「金融機関へ の信頼」が形 成された

(出所) 筆者作成。

である。講の例が示すように、マイクロレベルの結束型SCだけでは不十分で接合型SCが重要だというNarayanの指摘は正しいといえよう。

だが、ベトナムでよりいっそう重要なのはマクロレベルの社会関係資本である。これを形成していくには、PCFのように「金融規範をマイクロレベルの共同体に内部化する」というような工夫が必要である。この工夫がなければ、VBARDで見たように、マイクロレベルの結束型SCが発する負の外部性が、フォーマルな制度にマイナスの影響をもたらしてしまうであろう。

調査地において、金融制度の能力育成や信頼醸成はPCFを通じて進んでいると思われる。これらの積み重ねが、長期的には、フォーマルな制度を重視する社会の規範につながるのかもしれない。しかし、これには個々の機関の成功のみならず、経済の安定などマクロ政策も不可欠であることは言うまでもない。

おわりに

以上見てきたように、「農村金融制度」において社会関係資本がいかにかに作用し、あるいは新たに形成されるのかは、社会関係資本の範囲や機能、価値を区別してこそ説明できる。しかしながら、社会関係資本のみを「金融制度の成功要因」の説明に用いることは、それ以外の要素を捨象してしまう危険を伴う。本章では、講の参加・不参加要因の分析や、資金需要の性質への言及によって、金融の大前提である経済的要素にまで目を配ったつもりである。さらにこれらを数値化して、どの要素がどれだけ機能したかを分析する方法もあろう。

しかし、筆者はそこまで厳密になる必要もないと考える。マイクロファイナンスの成功要因を分析したこれまでの研究の大部分は、スキームの経済的合理性か、貧困層のエンパワメント効果などに着目したものが中心であった。どちらの説明をも否定するつもりはないが、濃密な人間関係のネットワークが張りめぐらされたベトナム農村を目の当たりにすると、やはり経済的合理性だけでは説明しきれないものを感じる。社会関係資本は、これまでのマイクロファイナンス研究の視点を補う有用なツールだと思われるのである。

注(1) <http://www.worldbank.org/poverty/scapital> (2000年9月閲覧)

(2) van Bastelaer [1999] は、インフォーマルな慣行も含め貧困層が利用するさまざまな融資スキームにおいて、社会関係資本がどのように働いているかという視点で、先行研究のレビューを行った。マイクロファイナンス・プログラムについては、グラミン銀行型のグループ連帯責任制を中心に社会関係資本を論じた。排除をもたらす社会関係資本や縦の社会関係資本への言及は注目に値するが、後付け的な説明の感は否めない。また、閉じられた関係の社会関係資本が議論の中心となっており、この論点のみに着目して詳細な実証分析を試みても、あまり実際的ではないと思われる。

- (3) Woolcock [1998] は、社会関係資本をマクロレベルとミクロレベルに分類し、さらに、ある社会に内在している (embedded) 社会関係資本と、外部の他者との関係で規定される (autonomy) 社会関係資本とに分類した。
- (4) 財国際開発高等教育機構のマイクロファイナンス研究会の一環として 2001年1月に調査を実施。調査のアレンジやベトナム語通訳については、投資計画省の Din Hien Minh 氏に大変お世話になった。
- (5) Van Hung Dao and Minh Giap Bui [1999] は、ベトナムの農村金融を「マイクロファイナンス」という視点で手際よくまとめている。人民信用基金については Van Hung Dao and A. Hotte [1998] 参照。
- (6) 須田・泉田 [1998] の調査でも中部での利用率が低いとの報告がある。

〈参考文献〉

〈日本語文献〉

- 岡本真理子・栗野晴子・吉田秀美 [1999] 『マイクロファイナンス読本——途上国の貧困緩和と小規模金融』 明石書店。
- 須田俊彦・泉田洋一 [1998] 『ベトナム農村金融の現状と問題点——ベトナム農村金融調査報告 (Department of Agricultural and Rural Resources Economics Working Paper Series, No.98-F-001)』。
- 服部良三 [1997] 「ベトナムの金融システムの変容と展開」(堀内昭義・山田俊一編『発展途上国の金融制度と自由化』アジア経済研究所)。
- 速水佑次郎 [1996] 『開発経済学』日本経済新聞社。

〈外国語文献〉

- Collier, P. [1998], “Social Capital and Poverty,” Social Capital Initiative Working Paper, No.4, World Bank.
- Narayan, D. [1999], “Bonds and Bridges: Social Capital and Poverty,” Poverty Group, PREM, The World Bank.
- Rose, R. [1998], “Getting the Things Done in an Anti-Modern Society: Social Capital Networks in Russia,” Social Capital Initiative Working Paper, No 6, World Bank.
- van Bastelaer, T. [1999], “Does Social Capital Facilitate the Poor’s Access to Credit?: A Review of the Microeconomic Literature,” Social Capital Initiative Working Paper, No.8, World Bank.
- van de Walle, D. [1999], “Protecting the Poor in Vietnam’s Emerging Market Economy,” *Vietnam’s Socio-Economic Development*, (19).
- Van Hung Dao and A. Hotte [1998], *Notebook 14/Study Case: People’s*

- Credit Funds in Vietnam*, Development International Desjardins.
- Van Hung Dao and Minh Giap Bui [1999], *Country Report: Micro-finance Sector in Vietnam*, Asian Development Bank.
- Woolcock, M. [1998], “Social Capital and Economic Development: Toward a Theoretical Synthesis and Policy Framework,” *Theory and Society*, 27(2).
- World Bank [2000], *World Development Report 2000/2001: Attacking Poverty*, New York, Oxford University Press.

〈本文引用以外の参考文献〉

- 村野 勉 [1996] 「ベトナム農業の刷新」(竹内郁雄・村野勉編『ベトナムの市場経済化と経済開発』アジア経済研究所)。
- Nguyen Xuan Nguyen and S. Nachuk [1998], “Brief Overview of Rural Finance in Vietnam,” *Vietnam’s Socio-Economic Development*, (14).
- UNDP Viet Nam [1998], *Expanding Choices for the Rural Poor-Human Development in Vietnam*, UNDP Viet Nam.
- Van Hai Mai and J. Fontenelle [1999], “Formal and Informal Credit in Rural Areas,” *Vietnam’s Socio-Economic Development*, (18).

